第十回

盆

お盆は、亡くなった親族の霊を供養する行事である。正月とともに一年の中でも最も重要な行事でもある。祖先の霊を迎える仏教行事の盂蘭盆会（うらぼんえ）から「盆」と呼ばれるようになったといわれている。盂蘭盆会と盆供（ぼんく）は中国を経て日本に入った行事だが、初春と初秋の満月の日に先祖の霊を迎える風習は仏教伝来以前からもともと日本にみられるものだったという。古代・中世では、七月十五日に寺院で盂蘭盆会がおこなわれたという。平安時代の朝廷は盆供を寺に届けていて、庶民もこれに倣うようになったといわれている。盆供を寺に届ける盆行事は鎌倉時代中頃に大きく変化し、室町・戦国時代・江戸時代と変化しながら続いてきた。

盆の祀り方

「清兵衛日記」には七月二日、清兵衛自身が紋付着物・羽織で墓参りと記している。災害でもない限り、着て行くものまで記していなかったので気が付かなかったが、慶応元（一八六五）年に「当年は類焼後の事なので、袴帯脇ざしは無しにして嶋着で参詣した」とある。その後の慶応四（一八六八）年七月二日に

「大泉寺墓参り　紋付着物・羽織

但し袴・脇さしなし」

と記し、墓参りはお布施（ふせ）を届けるためでもあったようだ。墓参りには清兵衛自身が出向いている。文久三（一八六三）年七月二日に

「大泉寺へ銀三匁　もち三十五
男衆へ廿四文ツツ弐包」

と記し、お布施と餅、男衆二人に二十四文ずつ包んでいるが墓守りとして、掃除など頼んでいるのかもしれない。その他のお供え品々を現金に換算し持参している。

施餓鬼

お盆に帰るべき家のない無縁仏は祟りやすく人に害を及ぼす存在として恐れられたが食べものを求めてさまよい苦しむ餓鬼と結びつき「施餓鬼会」（せがきえ）と称し、餓鬼に飲食を施す法会が行われた。施餓鬼会は平安時代以降寺院を中心に行われ、特に戦乱の打ちつづいた中世には諸宗の間で死者のための施餓鬼会が盛んに営まれたという。餓鬼の観念は民間の無縁仏と同じような意味で理解されるようになった。お盆に家々で迎えるのは先祖の霊が中心だが、そこに無縁仏や餓鬼仏が付いてくると考えられており、これに供物を施して供養する施餓鬼が各地で行われ「清兵衛日記」にもお盆前に例年「施餓鬼」が記されている。嘉永五（一八五二）年七月十一日

「昼八ツ時於大泉寺ニテ施餓鬼仕候
布施　金百疋」

清兵衛と義弟、元の使用人を同行し大泉寺へ清兵衛はお布施を持参し、塔婆をあつらえ、菓子を供えて供養している。帰りがてら清兵衛宅で一汁一菜の食事を用意している。

御精霊さん

お盆が近づくと、各家では家の中を清め、仏壇の掃除をして先祖の御精霊を迎える準備をする。「清兵衛日記」で「御しょ来様」は、はじめは何の事か理解ができなかったが御精霊（ごしょうれい）を「おしょらいさん」と呼んでいる事がわかった。

仏壇の飾りつけは家それぞれだが、十三日に墓地や山・川などから先祖の霊を屋内の飾り付けた仏壇に迎え入れ、各家では食べものを用意し季節の作物を供え、家族と共に十六日まで一緒に過ごす。十六日は精霊送りで送り火を焚いて川辺などに送り、供物も流し去り、精霊が戻って来ないようにと願う。清兵衛宅のお盆中の様子をみるとお盆中のお供え、献立は例年ほぼ同じである。嘉永五年を例にすると

「十三日

一日暮御仏壇飾り

お茶　打付だんご　ささき煮ぼうし」

お仏壇飾りは当日夕方行われ、お供えはお茶、だんご、ささき（大角豆）。打付は搗（つ）いた団子という事だろう。ささぎは大角豆で乾物のささげを茹でたものと思われる。

「十四日
一朝　牡丹餅　ひきそばしたし
一同配り　本家九ツ　香勘九ツツツ弐十（二重の重箱に九つずつ）
隠居五ツ
升善九ツ　水嘉九ツ　水和九ツ
お夏五ツ　お春五ツ
餅米弐升　白米弐升　小豆壱升五合
黒砂糖　高直ニ付代三百文　きなこ十文
白砂糖少々」

十四日朝に手作りの牡丹餅とひきそば。新そばをひいて作った意と思われる。したしはしたじの意かそばつゆのことと思う。牡丹餅を配った所は本家と親戚や元使用人など。砂糖の値段は変動しているようで高値とある。さらにこの十四の日の昼、夜は

「　生湯葉
一昼時　小芋　ずいき膾　向　朝瓜奈良漬
椎茸　茄子朝漬
一夜　お茶斗」

十四日の昼は煮物、膾（なます）、向（むこう）の三菜で煮物には生湯葉、小芋、

椎茸。膾はずいきを使い、向は漬物で古漬け、新漬けの二種。野菜類は季節の出初めや旬の物をお供えしている。夜はお茶ばかりである。三日目の十五日は

「一朝　白みそ　かも瓜　かも瓜みそかけ

一昼　そうめん　にしめ　かん瓜　　ゆば

一七ツ時　白蒸一蓮」　　高野

朝は一菜でかも瓜の白みそかけ。昼は素麺と煮しめ。煮しめはゆば、かんぴょう、高野豆腐。かんぴょうは乾物ではなく、冬瓜であろう。冬瓜も季節の野菜である。八ツ時に水花（西瓜）を供える年もあった。夕方にもち米の白蒸をお供えしている。

嘉永五年の十六日のお供えは記されていないので安政四（一八五七）年を例にすると

「一朝　御しょ来様佛様

八はい汁　　なら漬

一御しょ来様　初夜時分高瀬川江内證ニテ流し遣し申候」

清兵衛は御精霊と身近な御先祖様を並べて記している。朝は豆腐の八杯汁と奈良漬である。ご飯はいずれも記していないが、あって当然のことなので書かないのだと思う。十六日、夜の初めごろ精霊送りをする。高瀬川に内緒で流したとあるので、高瀬川は幅

が狭く小さな川なので、本来は大きい川に流すべきと密かに思っていたのかもしれない。

送り火

送り火は門口や川原などで焚くが、大規模な火の行事としての五山送り火がある。特に東山如意ケ嶽の「大文字」は有名だが十六日に盂蘭盆会の行事として行なわれている。この送り火は仏教が庶民一般に浸透するようになった室町時代以降に起こったという。「清兵衛日記」でも大文字送り火の記述がある。

「送り火大文字夕立ニテ東山不見　北山ハ見得申候」

安政五（一八五八）年のこと、夕立があり東山の大文字は見えないが、北山は見えると記している。清兵衛の住む五条橋通烏丸西入醍醐町からは送り火が見えたのであろう。

盆礼・盆祝儀

盆ごろの贈答を盆礼・盆祝儀と称し、「清兵衛日記」でも目につく。盆の贈答習俗が広く中元として今もみられるがこれは中国の道教の年中行事の一つで、旧暦の一月十五日を上元、七月十五日を中元、十月十五日を下元とし時の節目とした。中元は亡魂供養の行事を行う日をさしていたが、盂蘭盆会と期日が重なるところから、盆の贈答習俗が中元として行われるようになった。親元・仲人・師匠といった日頃からお世話になっている人に、挨拶という意味あいが強い。「清兵衛日記」でも本家や親戚、同業者などへの盆礼・盆祝儀のやりとりが細かく数多く記録されている。

【参考文献】

梅原　猛・他『京都のくらしの大百科』淡交社　平成十四年
福田アジオ・他『日本の年中行事事典』吉川弘文館　平成二十四年
菅原正子『日本人の生活文化』吉川弘文館　平成二十年
旧暦くらし研究会『おりおりに和暦のあるくらし』角川書店　平成十七年
小川直之著『日本の歳時伝承』角川ソフィア文庫　平成三十年